



「武器をとる男らしさ」の末路



早稲田大学法学学術院教授 弓削 尚子

ロシアのプーチン大統領を「有害な男らしさを示す完璧な例」と評する声がある。所有欲や支配欲をあらわに、専制的な権力を振るって軍事侵攻を命じるプーチンは、たしかにその典型といえよう。侵攻開始から3年以上の月日が流れ、ロシア軍の死傷者数は100万人を超えたという（軍の約1割を占める女性兵士の死傷者も含む）。「有害な男らしさ」は、自国の兵士たちの死も一顧だにしないのだろうか。

歴史上、男というだけで武器をとることを強いられ、多くの命が失われてきた。1970年代のアメリカで起こったメンズリブ（男性解放）運動の一つの契機が、ベトナム戦争に徴兵されることに対する男たちの異議申し立てであった。2018年に発表された国連の「軍縮アジェンダ」によると、全世界の暴力による死者のうち8割以上が男性や少年であるという（United Nations Publication, *Securing Our Common Future: An Agenda for Disarmament*, New York 2018, p.43）。男性は暴力の加害者で、女性はその被害者というステレオタイプは、男性の暴力被害を見えにくくしてきた。

戦場から帰還した兵士たちの中で、心身ともに健康な者などほとんどいない。「武器をとる男らしさ」の規範について彼らはどう振り返ったのだろうか。彼らの声なき声はいかなるものであったろう。名将や英雄を論じることはあっても、名もなき「使い捨てられた男たち」を忘失の闇に追い払ってきた歴史家は、これに答えることができない。

男性史研究の可能性を模索してきた者として、一冊の文学作品が気になっている。米国人作家ダルトン・トランボ（1905 - 76）による『ジョニーは銃をとった』（*Johnny Got His Gun*, 1939）は、負傷兵の究極の姿を描いた反戦作品として知られ、ある世代以上の人びとには懐かしさも覚えるかもしれない。作者自らが監督となってベトナム戦争時

に映画化し、日本でも多くの観客を動員した。小説は第二次世界大戦末期と朝鮮戦争時に発禁となり、ベトナム戦争時には世界的な反戦ムードの中、ベストセラーになった。日本語訳は1970年代に2種類出されているが、2024年秋に新訳が発表された（『ジョニーは戦場へ行った』波多野理彩子訳 角川新書）。

主人公は第一次世界大戦の塹壕戦で四肢と視聴覚、声帯を失い、わずかな触覚と運動機能のみを残すからだになった。頭部をベッドに打ちつけることで意思をもつことがわかる。「死んでなお考えられる脳みそをもった史上初の兵士だ」と自らを揶揄する。あくまでフィクションであるが、為政者を糾弾し、「武器をとる男らしさ」を問い、その末路を引き受ける言葉に惹きつけられる。

「犠牲を払えとか仰々しいことを言っていた人殺しの腐れ野郎どもがどれだけまちがっていたか、今ならわかる。そいつらには、こう言ってやる。死ぬだけの価値があるものなんありません。ぼくは死人だからわかるんです、・・・気高い死なんてない。たとえ名誉のために死んだとしても。死んでから世界でもっとも偉大な英雄になったとしても。・・・死んでしまったら演説のネタになるだけで何の価値もない。これ以上騙されちゃだめだ。・・・臆病者と言われても気にしちゃだめだ。・・・両手両足を砲弾で吹き飛ばされることのどこが気高いんだ？ 頭がおかしくなってしまうことのどこが気高いんだ？ 目も耳も口も失ったことのどこが気高いんだ？・・・」読者の心をつつ語りの数々のごく一部である。文学の想像力は偉大だ。彼は頭を打ちつけることで「現実世界」に対してモールス信号を送り、自分の思いを伝えようとする。

「お前たちはいったいどのような歴史を書いてきたんだ？」歴史家として、そのように叱咤されているようにも感じられる。

アトリアから見る 日本とオランダのジェンダー史

岡本 隣 (東京大学大学院総合文化研究科 修士課程)

アムステルダム駅から徒歩 20 分ほど、著名な観光地「シンゲルの花市場」からファイゼル通りを南に下り、最大のゲイタウンのあるレグリールスドワルス通りを超えると、一面の赤い本棚がガラス越しに目に入る。これが、オランダ最大規模のジェンダー史アーカイブ兼研究所、アトリア (Atria, Kennisinstituut voor Emancipatie en Vrouwengeschiedenis) の建物である。

アトリアの歴史は、3 人のオランダ人女性運動家たちによって 1935 年に設立された、国際女性運動アーカイブ (IAV) に遡ることができる。第二次世界大戦中はナチスによる略奪で閉鎖に追い込まれたが、1947 年に返還された一部の資料をもとに、再び開かれた。その後、他のアーカイブとの合併や移転などを繰り返したのち、2013 年 1 月 28 日に現在の名称となった。

アトリアのコレクションには、IAV 以来のアーカイブ資料からジェンダー史に関わる学術書や学位論文まで幅広い資料が所蔵されており、オンラインのカタログから検索可能である。試しに「Japan」と検索すると、ヒットする資料は 4851 件あり、オランダ語のものでは 1239 件、日本語のものも 43 件ある (2025 年 5 月現在)。これらは、フェミニズムやジェンダーに関する、オランダと日本の間の歴史をいかに物語っているのだろうか。

はじめに、著名な女性参政権運動家で、オランダ人女性初の法律家、経済学者、政治家でもあったリジー・ファン・ドープ (Lizzy van Dorp, 1872-1945) のアーカイブに着目する。彼女は、73 歳の誕生日を目前にして、旧日本軍によるジャワ島の強制収容所で亡くなった。アトリアには、彼女が残した手紙や日記だけでなく、死後収容所から家族の元に送り返されてきた実物資料も保管されている。

とりわけ印象的なのは、彼女が収容所で書き残したさまざまなレシピのメモ冊子である。

収容所で与えられる食事は、必要なカロリーを大幅に下回る大変質素なものであった。その裏返しとして、レシピのほとんどはミルクやチーズ、肉、果物など、ほとんど口にできなかった材料で構成されていた。

旧日本軍による侵略が起きた 1942 年、ジャワ島はオランダ領であり、旧日本軍占領後に数万人規模のオランダ人が収容所に送られた。ジャワ島内に作られた「慰安所」には、植民地生まれの女性も含め、オランダにルーツを持つ多くの女性が強制連行されたことも知られている。

時代を下って、1991 年に発行されたオランダ女性評議会のニュースレターでは、(奇しくもリジーの命日に当たる 9 月 6 日に) 日本の女性団体の訪問を受けたことがトップ記事となっている。記事によると、各国における女性の社会的地位や、子育て等に関する制度などについて情報交換を行ったようだ。

アトリアの名前の由来は南半球の空に輝く恒星である。この星は日本やオランダからはほとんど観測できないものの、古くから南洋航海のための指針となってきた。それによって旧植民地諸国にもたらされたさまざまな問題を含めて、現在の日本やオランダの歴史がある。また、日本からはジェンダー先進国に見えるオランダも、ジェンダー・ギャップ指数は他の EU 諸国と比べるとやや低い位置に留まり、女性の経済的自立が平等達成への課題となっている。

昨今極右政党によるバックラッシュなど、世界情勢の先行きがますます不透明になる中でも、今後ともアトリアがオランダにおけるジェンダー平等達成と、ジェンダーやフェミニズムの視点から日蘭の歴史と未来を考えるための拠点として、末長く輝き続けることを願う。開館は火曜から木曜、訪問には Web サイトから資料の予約が必要である。団体での館内ツアーも受け付けている。

2025年度事業計画

(2025年4月1日から2026年3月31日まで)

1

ジェンダー問題に関する 調査・研究

2024年度に、第3期プロジェクト研究会の初会合を開催した。2025年度は、ジェンダー視点から自由な議論を行う研究会を年数回程度開催し、研究を本格化させる。

<研究テーマ>

「男女雇用機会均等法及びパート労働法に関する立法過程の研究」

2

ジェンダー問題に関する研究への助成

(1) 個人研究助成

若手研究者を対象に、ジェンダー問題に関する研究計画を公募する。

研究テーマは、従来通り「自由論議」で募集する。

・募集期間 2025年4月15日～5月末日

・募集人数 若干名

・個人研究助成審査委員会を開催し、受託者を決定する。

・受託者には、①翌年度の個人研究助成受託者報告会への参加 ②所定の期日までに研究報告書の提出を義務づける。研究論文は年報『ジェンダー研究』に投稿することが望ましい。

(2) 団体研究助成

団体を対象にジェンダー問題に関する研究計画を公募する。

募集は単年度ごとに行い、分野を問わない。

・募集期間 2025年4月15日～5月末日

・募集团体 若干団体

・団体研究助成審査委員会を開催し、受託団体を決定する。

・助成を受けた団体には、所定の期日までに ①研究活動報告 ②収支決算実績報告書の提出を義務づける。

3

ジェンダー問題に関する シンポジウム、フォーラム等の開催

(1) ジェンダー問題に関する講演会を開催する。

(2) 個人研究助成受託者報告会を開催する。

(3) ジェンダー問題に関する講座を開催する。

(4) 賛助会員の交流の場として、「賛助会員のつどい」を公開して開催する。

4

ジェンダー問題に関する年報、 ニュースレター及び書籍の発行・出版

(1) 年報『ジェンダー研究』第28号を発行する。

構成は、依頼論文・公募論文などとする。

(2) 東海ジェンダー研究所の広報紙としてニュースレター『LIBRA』を位置付け、年3回発行する。

5

ジェンダー問題に関する資料・ 文献の収集と情報提供

(1) 研究図書・ジェンダー問題研究推進に必要な図書等の購入、寄贈図書の受入及び資料の整理

(2) 研究動向・研究情報ニュースの収集（関係諸機関との提携等による）

6

セミナー室の貸出

ジェンダー問題に関する研究会・研修会の利便に資するため、登録団体にセミナー室を貸し出す。

7

共催、後援及び他団体との連携

(1) 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)の運営と発展に、GRL運営小委員会等のメンバーとして関与する。また、東海ジェンダー研究所借用のGRL会議室をジェンダー問題に関する研究会等に利用する。

(2) 他団体から申し出があれば、検討の上、共催事業の開催や事業の後援を行う。

(3) (公財) あいち男女共同参画財団との連携を図るため、理事会及び「あいち女性連携フォーラム」に参加する。

(4) 「名古屋市男女平等参画推進会議」(イコールなごや)に参加する。

8

ジェンダー問題に関する意識の 啓発・普及を増進させるための 内外の機関又は団体への援助

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリへ2025年度分の運営資金を寄附するとともに、図書・資料の寄贈を継続して行う。

INFORMATION

お知らせ

2025年度 講演会

日 程 2025年9月27日(土)13:30~16:00
講 師 池田美奈子さん
テーマ デザインとジェンダー
会 場 名古屋都市センター14F特別会議室
詳細はチラシやホームページでお知らせします。

2025年度 賛助会員のつどい(公開)

映画『SHE SAID／シー・セッド その名を暴け』の鑑賞と解説
日 程 2025年11月16日(日)午後
解 説 柳澤幾美さん
会 場 名古屋国際センター別棟ホール
詳細はチラシやホームページでお知らせします。

公益財団法人東海ジェンダー研究所 2025 年度 役員名簿

役職名	氏 名	所 属
代表理事	西山 恵美	元愛知学泉大学教授
業務執行理事	日置 雅子	愛知県立大学名誉教授
理 事	青木 玲子	元国立女性教育会館客員研究員
理 事	新井 美佐子	名古屋大学大学院人文学研究科准教授
理 事	石田 好江	愛知淑徳大学名誉教授
理 事	小川 眞里子	三重大学名誉教授
理 事	尾関 博子	元名古屋市職員
理 事	武田 貴子	名古屋短期大学名誉教授
理 事	別所 良美	名古屋市立大学名誉教授
監 事	島 けい子	税理士
監 事	榮枝 るみ	税理士

役職名	氏 名	所 属
評議員	青木 千賀子	元日本大学大学院国際関係研究科教授
評議員	香川 せつ子	西九州大学名誉教授
評議員	佐藤 俊郎	環境デザイン機構取締役
評議員	中嶋 豊	弁護士
評議員	萩原 久美子	桃山学院大学社会学部教授
評議員	的場 かおり	大阪大学大学院法学研究科教授
評議員	來田 享子	中京大学スポーツ科学部・大学院スポーツ科学研究科教授
顧 問	水田 珠枝	名古屋経済大学名誉教授
顧 問	安川 悦子	名古屋市立大学名誉教授

(所属は 2025 年 4 月 1 日現在)

お詫びと訂正 | 前 83 号巻頭言「ガラスの天井にひび割れ～女性外科医たちの挑戦～」の左段最終行。「第 77 回」は、「第 78 回」の誤りです。お詫びして、訂正いたします。

賛助会員を募集しています。

賛助会費 年間 一口 1,000円
振 込 先 郵便振替口座 00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所
(振込手数料は当方負担)

他行からお振込みの場合

銀 行 名 ゆうちょ銀行
店 名 〇八九
預金種目 当座
口座番号 0077338
(振込手数料はご負担ください)

- * 会員の皆様には当研究所の年報「ジェンダー研究」やニュースレター「LIBRA」、講演会などの事業のご案内をお送りします。
- * 当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

男性は暴力の加害者で女性は被害者というステレオタイプの陰で、武器をとらざるを得ない男らしさに苦しむ男性の存在も忘れてはいけませんね。また、オランダのアトリアのコレクションから日本とオランダの歴史の一端を垣間見ることができました。今年度もよろしくお願いいたします。

LIBRA

公益財団法人 東海ジェンダー研究所

〒460-0022 名古屋市中区金山1-9-19 ミズノビル6F

T E L 052-324-6591 F A X 052-324-6592

E-mail info@libra.or.jp <https://libra.or.jp/>